町民文芸

只見短歌会

五月詠草

大塚栄一　指導

老いゆくも病なき日を願ひつつ膝の手術を受けしことあり　関谷登美子

又一人老いて離農をせしと言ひ若きらに従ふ友の心は　斎藤ちひろ

農作業忙しくなりて来し友の電子機への誘ひ甘んじて受く　五十嵐夏美

分け遣りし都忘れが咲きしとふ被災地の友と長き電話す　古川　英子

萌え出でし蓬摘み取り湯掻きして冷凍庫に入れ冬に餅搗く　渡部ゆき子

亡き友の愛で来し花ぞライラック咲きて懐かしき面影浮かぶ　吉津　政枝

老人車に体ゆだねて歩み行く友は蕗の薹摘みて押し居し　馬場　八智

切干しを広げ置きたる薄縁（うすべり）が風に捲れて大方こぼす　目黒　富子

亡き母の鰊漬け想い作らむと山椒入れしが味は及ばず　渡部ヨリ子

退院後も低血圧の続きゐてたゆき体の置きどころなし　新国　洋子

（出　詠　順）

只見俳句会

六月例会

目黒十一　指導

水切りの波縫う石や夏来たる　隆堂

自然都市宣言の町ブナ若葉　邦夫

鍬の柄を終えて首振る土壜割　リウコ

住み慣れし此処が天国更衣　リウコ

半ズボン履きし学童足勇む　敦子

夕顔の植うる所を探しおり　笑羊

病室に居て母の日となりぬ　笑羊

抜歯済み昨日に続く夕立かな　都

花冷えや主亡き靴の揃い有り　都

山桜想いを綴る一ページ　洋子

桜好きと言い切る人の三回忌　洋子

編みこんでしろつめくさのティアラかな　一穂

山間や祝詞しっとりお田植祭　一穂

献上米苗植え終わり風に立つ　一穂

山菜取りいつもの丘の一休み　敦子

土砂崩れ入山禁止と夏の山　礼

鶯の無性に啼くよ里に来て　修一

風鈴や煎餅かじる音立てて　修一

放射能汚染を知らぬ蕨かな　一灯

早朝の囀り高く予定立つ　一灯

のどかさや坂田屋敷の大時計　邦男

どの道も家路につなぎ犬ふぐり　邦男

仮住まい退去の日取り雀の子　吉児

生きてゆく事の交わりブナ若葉　吉児

山里や貧者の一灯初鰹　恒夫

早苗饗やふくた供へて神の棚　恒夫

星弥生七回忌

碑の夏の光の中に立ち　恒夫

五月闇婆にさそわる白き蝶　恒夫